

ことばの波に誘われて

MAME

宮沢賢治『春と修羅』

宮沢賢治の詩をはじめて意識したのは、小学校6年生だった。『詩を暗記して朗読しなさい。』その詩、というのが、宮沢賢治の詩『雨ニモ負ケズ』だった。

20代後半になった今でも、その時覚えた詩のことははっきりと覚えている。

アメニモマケズカゼニモマケズ...

ずっと私の心の底に、しみついて離れないその言葉。

次に、宮沢賢治の詩を意識したのは、ぐっと年をとった大学生になってから。学校の図書館で、詩集『心象スケッチ 春と修羅』の、当時発行された原本を読んだことだ。その1冊は、私にとって大変な衝撃をもたらした。

古い紙の持つノスタルジーな雰囲気、黄ばんだ表紙。

ぱらりとめくると、ことばが目に飛び込んでくる。序章。

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です -----

ズガンときた。わたしという現象。当時、未熟だった私は、生きていくことに迷いがあった。何をして生きていけばいいのか。自分の考えは正しいのかどうか。このまま思ったことを思ったままにやっていって本当にいいの？

そんな、小さい物事が、判断を鈍らせていた。

賢治の言葉は、物事を、とても遠いところから言い当てる。

わたしは現象なのだ。宇宙からみれば、ちっぽけなひとつの電燈なのだ。

冒頭からそんな風に、突き放される。いや、放り出される。賢治の作りだしたことばの宇宙に。

詩集を読む というのは、小説を読むとも違う。エッセイを読むとも違う。

詩集はイメージである。

ことばを次から次に漂って、やがて作者の作りだした壮大なイメージに放り投げられるのだ。

そして、詩は、本質であると思う。

芯なのだ。

思えば、小学6年のころに賢治の詩に出会って、さまざまな場面で、私は思いだしてきた。そのことばを。

25歳を過ぎて、ようやく、賢治の本を買った。

新潮文庫から出ている、『宮沢賢治詩集』。

ああ、ようやく手元にやってきたんだな、と思った。

今まで長い間、旅をして、ことばが手元に戻ってきたようだった。賢治の生み出したことばたちは、20年間以上もの時間を、私の中でともに歩んできた。いや、私が生まれるずっとずっと前から、そのことばたちは、世界を漂い続けていたのだ。そして、そのことばの破片に、ようやく出会ったのだった。

はじめまして。こんにちは。

いや、今までにも確かに、私はあなたを知っていた。

何十年も経って、幼いころの旧友に再会したような気持ちになった。

今日からまた、よろしくお願ひします。

そんな気持ちで、久しぶりに読んだ『春と修羅』は、昔と変わらない強さで、そこにある。今でも、ふと、迷いそうになったときには、『序』を、ゆっくりと声に出して読んでみる。すると、あの日、20歳だった私の、世界が眩しくて自分がちっぽけだった気持ちが、ふとよみがえってくる。

明日からも自分なりに、小さな電燈を灯してみようか。

それが誰にも見つけられなくても。

宇宙の片隅で、静かにその時を待とうか。